

子どもの日本語教育研究会第6回大会企画パネル  
多文化の子どもたちの育ち・キャリアー群馬県大泉町からの報告をもとに

# 外国人保育士のキャリア形成 — 周辺化された自分から当事者としての自分へ —

佐々木由美子

足利短期大学こども学科

NPO法人わくわく広場の会

[sasaki@ashikaga.ac.jp](mailto:sasaki@ashikaga.ac.jp)

2021年  
1月31日現在

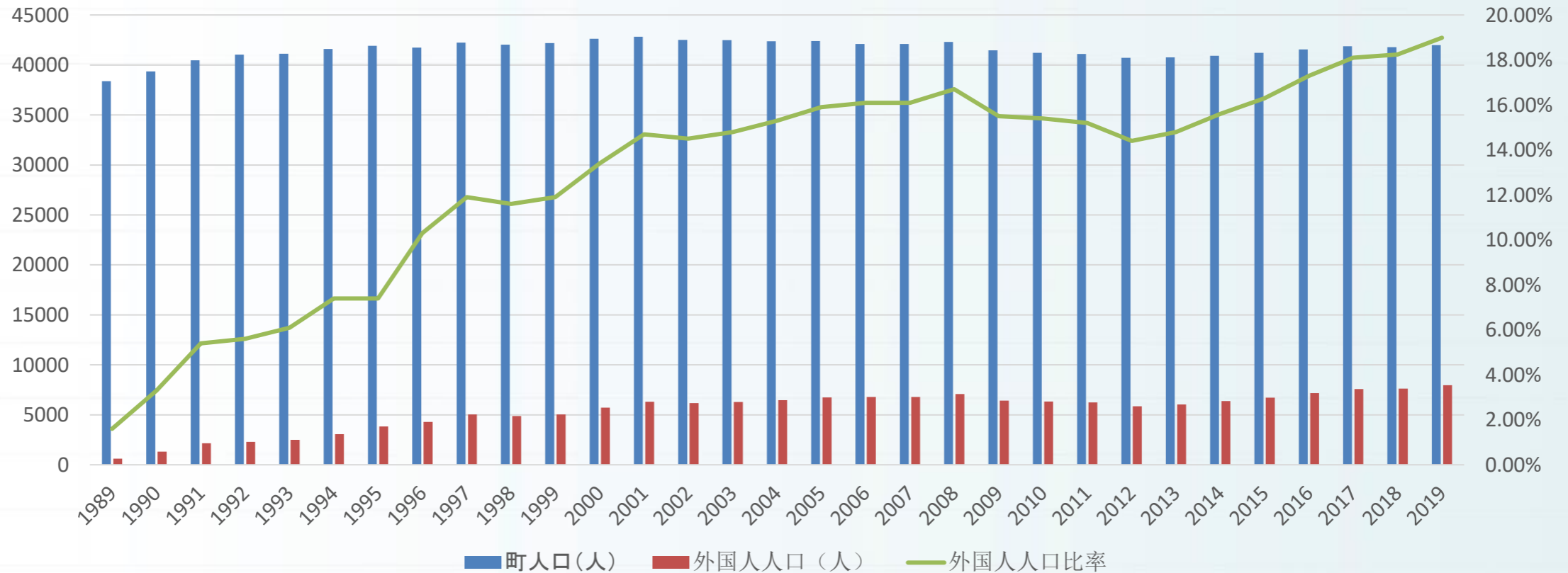
人口総数

外国人人数(%)

41,747

7,907(18.94%)

大泉町の外国人人口と人口比率の推移







# 大泉町の認可保育園(地域6園)の 外国人児童の割合



全ての園で外国人児童を保育

外国人児童の比率20%前後で推移、  
集住地域では30%ほど  
※外国文化で育つ子ども、外国  
ルーツの子どもを含めると更に多い

# 大泉町の保育園で働く外国人保育士



保育士	来日時の年齢	ルーツがある国	採用年	勤務形態
A	12歳	ブラジル	2007	民間(正採用)
B	6歳	ペルー	2011	公立(臨時採用)
C	3歳	ブラジル	2013	民間(正採用)

# 保育士という職業選択の背景



## きっかけ

「コミュニケーションがうまく行かず、日本語がわからないことで不利になったり叱られたりしている子どもとの出会い」

＝自分自身の来日当時の経験と重なる子どもの姿との出会い

## 「外国人保育者」としてのキャリア・アンカー

- ・「子どもが好き・誰かの役に立ちたい」
- ・「得意な領域で自分の技能を活用できる」⇒「母国語ができる」
- ・「奉仕・社会貢献・役に立ちたい」⇒「外国人児童・保護者」

# 周辺化された自分から当事者へ



《媒介者としての自分》

子どもの気持ちがわかる  
子どもの気持ちを代弁できる  
母語が役に立つ  
自己効力感

《周辺化されている自分》

日本語が理解できない  
学習困難に陥る  
いじめを受けることがある  
不登校・不就学  
学校には頼れない  
両親に不満を持つ  
外国人である自分を否定する

要因作用

変容

《当事者としての自分》

保育者になりたい  
保護者と保育者の媒介者  
子どもの困難克服の一助  
母国の文化を伝えたい  
子どもの意欲を促進  
子どもの進路選択を拡大

# 苦勞して資格を取得





# 外国人保育士ゆえの苦悩



## 保育者A

保育士としての仕事に加えて通訳・翻訳  
他の保育士からの通訳としての大きな期待  
時間外の仕事の増加

休職してブラジルへ

## 保育者B

最初に勤務した保育園での役割⇒通訳・翻訳  
子どもと関わる機会がほとんどない  
他の保育士との溝


退職してペルーへ

## 保育者C

自分の母国語能力への不安(保育士Aと比べて)  
母国語であるポルトガル語を保育の中で使いたくない  
アイデンティティの揺らぎ

母国語の学び直し

# 苦悩から脱出



保育者A(休職中)

勤務園の保育士が、Aに頼りすぎていたことに気づく  
日本人保育士ができることを自ら行う

Aの負担が減る

母国語と文化を保育に生かす

保育者B

大泉町の公立保育園に勤務  
子どもと関わることのできる保育士

同僚の理解

母国語や文化を保育に生かす

保育者C

母国語への自信  
多文化保育についての園内研修を担当

母国語や文化を保育に生かす

# 外国人保育士の役割



母国語を介した保育支援

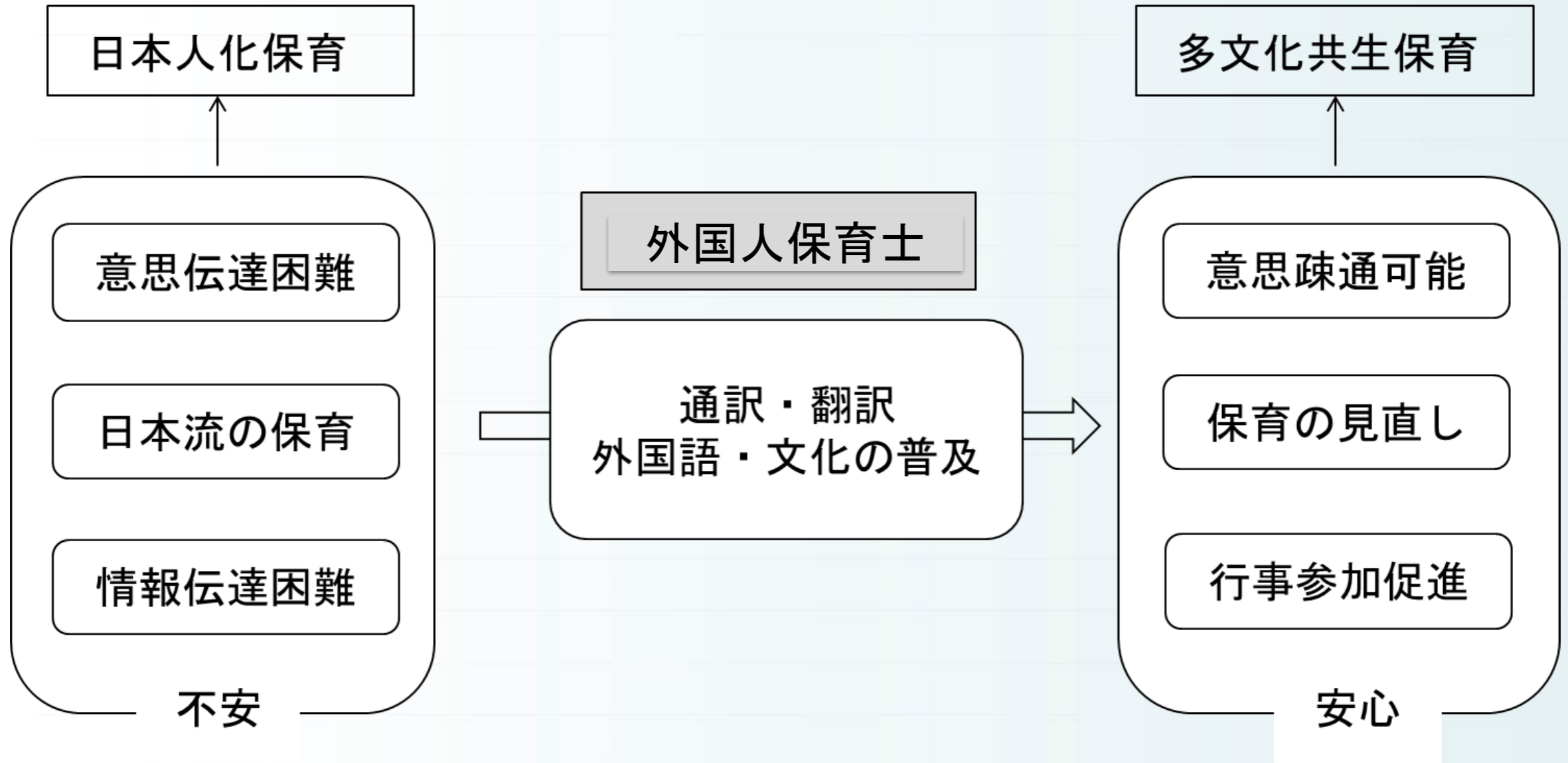


媒介者としての役割を果たす

外国人児童保護者に安心感を

外国人児童の保育園適応促進

# 日本人化から多文化共生へ





# 外国人保育士の成長



周辺化された自分⇒当事者としての自分



保育現場で当事者として子どもたちと関わる



媒介者として自らの経験と活動の意義を  
つなげながら保育実践を行う

# 外国人保育士の実践能力



実践能力の要素（保正2013）

①個としての側面 価値・知識・技術を統合して発揮すること

保育士の知識・技術＋媒介機能（通訳・翻訳）

②関係性にもとづく側面 自分是他者の役に立つのか

子どもたちの役に立つ当事者としての自分

③専門的な自己を確立する状態 ①・②の集約

外国籍保育士としての専門的自己の確立

# 外国人保育士がロールモデルとなる



# 外国人保育士のキャリア形成 — 周辺化された自分から当事者としての自分へ —

ご清聴  
ありがとうございました



佐々木 由美子